



山登如

2021年度 付中通信第7号

夏の試み

2021.8.10（火） 高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

たかちゅうの学年行事の中でも2泊3日という最も長い時間を一緒に過ごすサマースクールは、その昔、「キャンプ」とストレートに呼ばれていました。学校行事の中でも最古参に属する伝統行事です。

自前でテントを張って薄いマット越しに固い地面の存在を感じながら、寝返りも打てないような狭い空間に何人もの仲間と一緒に一晩を過ごす、そんな昔は当たり前だったキャンプの醍醐味（寝苦しさと息苦し



さ)をそのまま体験させる学校はほとんどなくなりました。つらいと言えば、これも昨今、流行らなくなりましたが、海洋訓練というのがありました。あれもそのまま今実施したら、人権問題だとか言われてしまいそうな気がします。一つことが起こるごとに連帯責任という言葉で、指導者の意に沿うまでやり直しを命じられたものでした。

さて、昔のキャンプ場には炊飯場という便利なサイトもなかった気がします。水だけはなんとか確保できましたが、班ごとに炊飯設備に供する貧しい機材を与えられ、飯盒めしや鍋物を料理する場所を自分たちだけで組んでいたと思います。そんな感じですから、大小のためのトイシも役割を決めて一生懸命穴を掘って仕立てた記憶が残っています。





今思い起こせば、夢のような体験でしたが、今の中学生たちにはとても危険すぎて体験させられません。ごく一部の生徒は何とか順応できるかもしれませんが、刃物を扱ったり、火を起こしたり、自炊したり、最も基本的な生活体験が極めて少ない上に、ものを扱う経験値が恐ろしく欠けているからです。

物と身体の間感覚というか、物を動かしたり操ったりする経験が乏しい日常生活を送っていると言え、それまでかもしれません。鉋も包丁も鍋も、薪やマッチまで手や指先になじむまでにはそれ相当の時間がかかります。場合によっては手を切ったり火傷したりする経験があって初めて、板についてくるのかもしれません。

サマーセミナーでは、いつもとちょっと違う面を見せる子どもたちに出会えます。でも、年々、人としてやはり要るだろうという、生活を通して身につく感覚がざっくりと抜け落ちてしまっている生徒が徐々に増えてきています。

この集団研修会では、いちどきにその欠落を補うことなどできませんし、そんなことを目指してもいませんが、でも、仲間を意識させるくらいのことはできていると私は私を納得させています。

